

令和 7 年度 歴史総合＋世界史探究 (02コア・01プラス)

試験開始の合図があるまでに、次の注意をよく読んで、間違いないように受験してください。

1. 試験開始の合図があるまで冊子を開かないでください。
2. この冊子には問題23ページ、マークによる解答用紙~~マーク~~、記述による解答用紙~~記述~~各1枚がセットになっています。
3. 試験開始の合図があったら、問題のページ数を確認し、解答用紙~~マーク~~・~~記述~~をミシン目で折ってから冊子よりていねいに切り離し、すべての解答用紙に受験番号を記入してください。
解答用紙~~マーク~~の受験番号欄は、右を参考に記入してください。
4. 問題・解答用紙に落丁、乱丁、印刷不鮮明などの箇所がある場合には申し出てください。
5. 解答用紙~~マーク~~はすべて HB の黒鉛筆(シャープペンシル可)で記入することになっています。答えを訂正する場合は、プラスチック消しゴムでよく消して、訂正してください。プラスチック消しゴムを忘れた人には貸与します。
6. 解答用紙~~記述~~は、HB 以外の黒鉛筆(シャープペンシル可)や黒・青の万年筆またはボールペンを使用してもかまいません。
7. 文字ははっきり、ていねいに書いてください。
8. 解答用紙の点数欄には何も記入しないでください。
9. 複数の解答用紙がある場合、使用していない解答用紙は机の上に裏返しにしてください。

例 受験番号が
0 6 3 7 のとき

受験番号					
	千位	百位	十位	一位	
	0	6	3	7	
0	●	○	○	○	0
1	○	○	○	○	1
2	○	○	○	○	2
3	○	○	●	○	3
4	○	○	○	○	4
5	○	○	○	○	5
6	○	●	○	○	6
7	○	○	○	●	7
8	○	○	○	○	8
9	○	○	○	○	9

02コア・01プラス

良い例	悪い例

受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークすること。

I A

	①	②	③	④
(1)	①	②	③	④
(2)	①	②	③	④
(3)	①	②	③	④
(4)	①	②	③	④
(5)	①	②	③	④
(6)	①	②	③	④
(7)	①	②	③	④
(8)	①	②	③	④
(9)	①	②	③	④
(10)	①	②	③	④

I B

	①	②	③	④
(1)	①	②	③	④
(2)	①	②	③	④
(3)	①	②	③	④
(4)	①	②	③	④
(5)	①	②	③	④
(6)	①	②	③	④
(7)	①	②	③	④
(8)	①	②	③	④
(9)	①	②	③	④
(10)	①	②	③	④

II A

	①	②	③	④
(1)	①	②	③	④
(2)	①	②	③	④
(3)	①	②	③	④
(4)	①	②	③	④
(5)	①	②	③	④
(6)	①	②	③	④
(7)	①	②	③	④
(8)	①	②	③	④
(9)	①	②	③	④
(10)	①	②	③	④

II B

	①	②	③	④
(1)	①	②	③	④
(2)	①	②	③	④
(3)	①	②	③	④
(4)	①	②	③	④
(5)	①	②	③	④
(6)	①	②	③	④
(7)	①	②	③	④
(8)	①	②	③	④
(9)	①	②	③	④
(10)	①	②	③	④

受験番号					
	千位	百位	十位	一位	
0	①	①	①	①	0
1	①	①	①	①	1
2	②	②	②	②	2
3	③	③	③	③	3
4	④	④	④	④	4
5	⑤	⑤	⑤	⑤	5
6	⑥	⑥	⑥	⑥	6
7	⑦	⑦	⑦	⑦	7
8	⑧	⑧	⑧	⑧	8
9	⑨	⑨	⑨	⑨	9

I C

	①	②	③	④
(1)	①	②	③	④
(2)	①	②	③	④
(3)	①	②	③	④
(4)	①	②	③	④
(5)	①	②	③	④
(6)	①	②	③	④
(7)	①	②	③	④
(8)	①	②	③	④
(9)	①	②	③	④
(10)	①	②	③	④

II C

	①	②	③	④
(1)	①	②	③	④
(2)	①	②	③	④
(3)	①	②	③	④
(4)	①	②	③	④
(5)	①	②	③	④
(6)	①	②	③	④
(7)	①	②	③	④
(8)	①	②	③	④
(9)	①	②	③	④
(10)	①	②	③	④

本欄は記入しないこと。	
十位	一位
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤
⑥	⑥
⑦	⑦
⑧	⑧
⑨	⑨

CB02W-OMR



Ⅲ

(1)	
(2)	
(3)	
(4)	
(5)	

(6)	
(7)	
(8)	
(9)	
(10)	

総 点	
--------	--

評 点	
--------	--

Ⅳ

	A (誤)	B (正)
1		
2		
3		
4		

	設問
(1)	
(2)	
(3)	
(4)	

評 点	
--------	--

Ⅴ

(1)	
(2)	
(3)	
(4)	
(5)	
(6)	

(7)	
(8)	
(9)	
(10)	
(11)	
(12)	

評 点	
--------	--

問題は次のページより始まります。

I 次のA・B・Cの文章を読み、それぞれ(1)～(10)の設問について〔 〕内の語句から最も適切と思われるものを選び、その記号を解答欄にマークしなさい。〔解答用紙~~マーク~~〕(30点)

A 世界で最初に鑄貨を製造したといわれる王国 (1)〔①リディア ②マケドニア ③パルティア ④バクトリア〕は前7世紀に小アジア西部を支配していた。(1)はクロイソス王の治世で最盛期を迎えた。その都サルデイスにはギリシアの賢人たちも数多く訪れたという。

(2)〔①ミレトス ②アテネ ③スパルタ ④テーベ〕で貴族と平民の調整者として(3)〔①陶片追放 ②封建制 ③直接民主制 ④財産政治〕の制度を定め、債務奴隷を禁止するなどして、ギリシア七賢人にも必ず数え入れられるソロンもまた、サルデイスを訪ねた一人だった。クロイソスは歓待し、富を見せびらかしたうえで、世界一幸福な人は誰かと尋ねた。ソロンは名誉の戦死を遂げた(2)のテロスという人物や、お祭りで親孝行をした後、睡眠中に死んだとある兄弟の名をあげた。自分だと言ってくれないことに苛立ったクロイソスにソロンは言った。人間は死ぬまで何が起こるか分からない、人間は死ぬまでは幸運とは言えても幸福かどうかは断定できないのだ、と。勿論クロイソスはその答えが気に食わなかった。

時がたち、クロイソスは新興の隣国であるアケメネス朝ペルシアに攻め入るかどうか迷っていた。クロイソスは(4)〔①エフェソス ②デルフォイ ③プラタイア ④ペラ〕の神託に尋ねた。神託の答えは「出兵すれば大国が滅ぶ」というものだった。その大国をペルシアだと思ったクロイソスは攻め入るが敗北を喫し、サルデイスは陥落、クロイソスは火あぶりの刑に処されそうになる。クロイソスは今わの際にソロンの名を叫んだ。ソロンの言っていたことの意味がやっと分かったのである。当時アケメネス朝ペルシアの王であった(5)〔①アレクサンドロス大王 ②リュクルゴス ③クセルクセス ④キュロス2世〕はクロイソスが何か言っているのを聞きたいと思い、ソロンの話を聞いて感銘を受け、クロイソスを殺すのをやめたという。

このソロンとクロイソスの物語は、「歴史の父」と称される前5世紀の(6)〔①

ヘシオドス ②ホメロス ③ピンダロス ④ヘロドトス] が、ペルシア戦争を主題とした『歴史』の中で伝えている。

ソロンと同時代の、やはり七賢人にも数え入れられる人物に、万物の根源は水であるとした(7) [①タレス ②ピタゴラス ③ヘラクレイトス ④デモクリトス] がいる。プラトンの弟子であり、後にイスラーム哲学や中世ヨーロッパの哲学・神学に大きな影響を与えた(8) [①アガ멤ノン ②アリストファネス ③アリストテレス ④アリストアルコス] に、その(7) は最初の自然哲学者であるとされている。漁師が網にかかった黄金の^{かなえ}鼎をどう処遇しようか(4) の神託に尋ねると最も賢い人に贈れと言われ、最初に贈られたのがその(7) だという伝説もある。(7) はピアスという人物にそれを譲り、自分が最も賢いわけではないと思った人物たちを巡って、結局、^{かなえ}鼎は(7) のもとに戻ってきたのだという。その人物たちが7人いたので七賢人という訳だ。最終的に^{かなえ}鼎は、神託の神アポロンに捧げられることになった。このことは人間には神に敵うような賢い知恵などあろうはずがないということを示しているとされる。この発想は、プラトンの師である(9) [①ソフォクレス ②ソクラテス ③プロタゴラス ④ゼノン] の「不知の自覚（無知の知）」とも共通する。(9) は善美なものに関して本当に知を持つのは神であって人間ではないとし、その知を愛し求める営みであるフィロソフィア（哲学）をはじめ、(2) の市民に、名誉や金銭ではなく魂に配慮せよと説いた。そして、(10) [①ペロポネソス ②ディアドコイ ③ポエニ ④トロイア] 戦争での敗戦の後、民主制が復活した(2) での民主的な裁判によって死刑に処せられてしまった。

B 中国四大奇書に数えられる『水滸伝』は、北宋末期を舞台とする創作であるが、実在の人物も少なからず登場するのが興味深い。

物語は、仁宗が流行する疫病を鎮めるため、龍虎山に住む張天師を都に招くべく使者を派遣するところから始まる。この使者が伏魔殿の封印を解いてしまい、解き放たれた108人の悪魔が実は『水滸伝』の主役たる108人の好漢だったというしくみなのだが、この張天師にはモデルがいる。後漢末に五斗米道を創始した(1)〔①張角 ②張儀 ③張陵 ④張衡〕の子孫は代々龍虎山に居を構えて布教を行い、その教団は後に正一教と呼ばれ、リーダーである彼らも張天師と呼ばれるようになったのである。なお、正一教は(2)〔①朱全忠 ②王重陽 ③寇謙之 ④王陽明〕の創始した全真教と道教界を二分する勢力となった。

『水滸伝』における北宋の皇帝は(3)〔①神宗 ②欽宗 ③太宗 ④徽宗〕である。彼は風流天子と言われ、文芸を保護し自身も書画の名手として活躍した。『水滸伝』中でも彼の文芸好き、いや道楽者ぶりは健在で、作中の悪役「四姦」のひとり高俅は、即位前の(3)に蹴鞠の技を見込まれて気に入られ、出世したということになっている。ちなみに「四姦」はいずれも実在の人物で、そのひとり蔡京は(3)の宰相として実権を握り、反対派を弾圧するなど専制的支配を行ったが、その背景には当時繰り返された党争もあった。彼は(4)〔①王安石 ②司馬光 ③張居正 ④秦檜〕の政策を支持する新法党の一員として、対立する旧法党を攻撃したのであり、詩文や書画などの各方面で優れた業績を残した(5)〔①柳宗元 ②蘇軾 ③顔真卿 ④韓愈〕も著作が発禁処分を受けている。

さて『水滸伝』は、様々な理由から世の中に受け入れられなかった108人の好漢が、紆余曲折を経て次第に梁山泊と呼ばれる沼沢地帯に結集していき、そこを根城に暴れ回るというストーリーである。梁山泊のような場所は山林藪澤と呼ばれ、古くから犯罪者が隠れ住む好適の場所となっていた。時代を遡れば、(6)〔①漢 ②魏 ③晋 ④蜀〕を建国した劉邦も、蜂起する前は逃亡してそのような場所に隠れていたという。梁山泊の面々は、その多くが何らかの罪に陥れられて追われる身となり、山寨にこもって公権力に従わない姿勢を取っていたため、やがて「四姦」の高俅や童貫が率いる朝廷の追討軍が差し向けられるが、梁山泊軍はそれをさんざんに打ち破る。このように徹底して公権力に反抗していた彼らで

あったが、終盤では実は朝廷に忠義を尽くしたいという本意があることが明かされ、あっさりと朝廷に帰順する。梁山泊軍は帰順後、当時北方で勢力を持っていた(7)〔①金 ②遼 ③西夏 ④元〕に遠征してこれを屈服させるという戦果を挙げるが、さすがに荒唐無稽もいいところで、実際には(7)は常に北宋を圧迫し、宋は(7)に対して毎年多額の銀や絹を贈ることを余儀なくされていた。『水滸伝』中の(7)遠征エピソードは、ままならぬ現実の裏返しなのであろう。

梁山泊軍はその後各地の反乱勢力の鎮圧に派遣され、江南地方で起こった方臘の乱を鎮圧するのに貢献する。この反乱は実際に起こったもので、一説によると方臘は当時南方に広まっていた「喫菜事魔」の徒、つまりマニ教の信者たちを率いて蜂起したという。マニ教とはもともと(8)〔①ウマイヤ朝 ②ササン朝ペルシア ③パルティア ④サーマーン朝〕でマニによって創始された宗教で、中央アジア経由で中国にはすでに7世紀末に伝播していた。この反乱には他にも(9)〔①茶 ②塩 ③アヘン ④酒〕の密売者集団のつながりが影響を与えていたのではないかとする説もある。(9)は、唐代から宋代にかけて一般庶民の間で広く普及しはじめ、北宋により専売化されていた。

梁山泊の面々はかくして大活躍を見せるものの、最後はリーダーの宋江らが「四姦」の企みにより毒を盛られ、非業の最期を遂げる。もっとも、史実ではこの後、北方で新たに勃興してきた(10)〔①金 ②遼 ③西夏 ④元〕と手を結んで(7)を挟撃し、これを滅ぼした北宋は、約に背いて(10)の怒りをかい、その南侵を招いて華北を占領される。(3)は(10)に連れ去られ、「四姦」も責任を問われて童貫は誅殺、蔡京は配流途中で病死、高俅は病死後官職剥奪などの目に遭い、彼らは現在でも北宋滅亡の原因を作った姦臣・佞臣として悪名を残している。

C イタリア人には、親しさや愛情を込めて姓ではなく名で人を呼ぶ文化が存在する。天才芸術家たちの中にも、ラファエロ、ミケランジェロのように名を通称として呼ばれ続けている人たちがいる。最晩年にはイタリアを離れ、(1)〔①フィリップ4世 ②ルイ13世 ③シャルル7世 ④フランソワ1世〕の治めるフランスでその生涯を終えたレオナルド＝ダ＝ヴィンチも、レオナルドというとても一般に広く普及した名ではあるが、イタリア人にとっては名で呼ぶ存在である。文学者の中で、そうした呼ばれ方をする筆頭は、ダンテである。13世紀後半に生を受け、14世紀前半にこの世を去った彼の生涯と作品は、その時代の政治と文化の要素にあふれている。

ダンテはイタリア＝ルネサンス発祥の地として知られるフィレンツェで生まれた。13世紀の後半には、イタリアの多くの都市で、皇帝党と、(2)〔①ルーシ ②ギベリン ③ロマ ④ゲルフ〕と呼ばれる教皇党との間で、都市内の有力者たちが派閥抗争を繰り広げていた。中世のフィレンツェでは多くの時期において教皇党が優勢であったが、教皇党は其中で、さらに黒党と白党に分かれて対立していた。白党が政権を握ったさい、白党に属していたダンテは都市の要職に就任した。しかし14世紀初頭の政変で政権は黒党に移り、ダンテは都市からの追放刑を科され、その後死ぬまでフィレンツェに戻ることはなく、ユスティニアヌス帝を描いたモザイク画で有名なサン＝ヴィターレ聖堂がある都市(3)〔①ヴェネツィア ②ミラノ ③ボローニャ ④ラヴェンナ〕にてその生涯を終えた。

中世には「教皇は太陽であり、皇帝は月である」という比喩に見られるような教皇至上主義の見解があった。この比喩は古くは第4回十字軍を提唱した教皇(4)〔①インノケンティウス3世 ②レオ3世 ③グレゴリウス1世 ④ウルバヌス2世〕が用いたことでも知られている。ダンテの複数の作品の中にもこの比喩に類する表現が指摘されている。

しかしながら、ダンテは教皇至上主義者として必ずしもこの比喩を用いているわけではない。ダンテの生きた時代に起こった(5)〔①タタールのくびき ②アナニー事件 ③カノッサの屈辱 ④トゥール＝ポワティエ間の戦い〕において捕らえられた教皇(6)〔①レオ10世 ②グレゴリウス7世 ③フランチェスコ ④ボニファティウス8世〕も教皇至上主義者として知られているが、ダンテは『帝

政論』という著作で同時代の教皇至上主義的な言説を論敵として設定している。『帝政論』では、皇帝権は神によって直接に根拠づけられたものであり教皇権の仲介は不要である、ということの証明が目指されている。ダンテの生きた時代は、教皇権も皇帝権も、それぞれの中世における最盛期を過ぎていたといえるが、それゆえに両者の戦いは文書や言論の分野で争われていた面があった。『帝政論』はダンテの死後、反教皇闘争の理論武装書として広く読まれ、16世紀にはカトリック教会の禁書目録に加えられたこともあった。『帝政論』の執筆時期については諸説あるが、教皇党として活動したが別の教皇党によって追放されたダンテの生涯、そして当時の政治情勢を絡み合わせると、ダンテの複雑な心境が浮かび上がってくる。

またダンテの著作の一つに、『俗語論』という作品がある。ラテン語で公式文書を作成する文化が根強い中世社会において、俗語に注目したのはダンテの功績の一つだが、その背景には、俗語に関する文化が地中海世界に存在していたことが挙げられる。南フランスでは、(7)〔①プレスビテリアン ②トゥルバドゥール ③クレオール ④キュリロス〕と呼ばれる吟遊詩人が俗語で詩を口にしていたし、ダンテの時代より少し以前のシチリアでは、第5回十字軍の計画に関与したシチリア王兼神聖ローマ皇帝であった(8)〔①リチャード1世 ②フリードリヒ1世 ③フリードリヒ2世 ④ハインリヒ4世〕の(9)〔①パレルモ ②サレルノ ③アーヘン ④アヴィニョン〕の宮廷で、イスラーム圏の学問を含む様々な文化が展開していたが、そこでは吟遊詩人の語る詩も開花していた。ダンテもこうした文化の影響を受けて、さらに新たな世界を展開したと考えられている。

ダンテ以降、フィレンツェでは優れた俗語作品が次々と生み出される。ダンテ同様、フィレンツェの政治の場面で活躍し、自分の生きた時代の政治状況を意識して支配者のあるべき姿を唱えた(10)〔①エラスムス ②セルバンテス ③マキャヴェリ ④ボダン〕の『君主論』もルネサンスを代表する俗語作品である。

- Ⅱ 次のA・B・Cの文章を読み、それぞれ(1)～(10)の設問について〔 〕内の語句から最も適切と思われるものを選び、その記号を解答欄にマークしなさい。〔解答用紙~~7~~〕(30点)

A アフリカ大陸の各地域には、大陸の外との関わりから形成された固有の歴史と文化がある。

東アフリカの沿岸部は、古くからアラビア半島方面との交易が活発で、ムスリム商人が定着した地域である。この地域では、アラビア語の影響を受けた(1)〔①アラム語 ②スワヒリ語 ③タミル語 ④ベルベル語〕が共通語として用いられ、(2)〔①ガレオン船 ②三段櫓船 ③ジャンク船 ④ダウ船〕を利用する季節風貿易によってインド洋周辺の諸地域とも交流があった。

西アフリカの内陸部では、古くから(3)〔①ゴビ ②サハラ ③タクラマカン ④ナミブ〕砂漠を経由して北アフリカとのあいだで岩塩や金などが交易されていた。この地域では12世紀頃からイスラーム化が進み、マリ王国などイスラーム教徒が支配する王朝が建設された。マリ王国の王(4)〔①アクバル ②サラーフ＝アッディーン ③マンサ＝ムーサ ④ムアーウィヤ〕は、14世紀にメッカ巡礼を行なったことで知られる。

西アフリカのギニア湾地域では、15世紀頃からしだいに進出してきたヨーロッパ人と積極的に交易する勢力もあった。その一例が(5)〔①アクスム王国 ②アチェ王国 ③ダホメ王国 ④マラッカ王国〕だが、同国はヨーロッパ人と奴隷貿易を行ない、周辺地域の荒廃を助長した。

19世紀以降、ヨーロッパ諸国の影響は内陸にも及んだ。とくに19世紀末になると、1884年から85年にかけて(6)〔①パリ ②ベルリン ③ローマ ④ロンドン〕で開かれた国際会議で列強による領土占有の原則が定められ、現地の民族や社会状況を見下した分割が本格化した。長期にわたる植民地化の影響は、現代の公用語にもみることができる。たとえば、ケニアや南アフリカは英語、セネガルやマリはフランス語、アンゴラや(7)〔①エジプト ②スーダン ③モザンビーク ④リビア〕はポルトガル語というように、かつての宗主国の言語を用いている国々が多い。

19世紀から20世紀にかけて、アフリカの人々はヨーロッパの支配に対して様々なかたちで抵抗した。1896年のアドワの戦いでイタリアを破った(8)〔①アルジェリア ②エチオピア ③ナイジェリア ④モロッコ〕のように、軍事力で打撃を与えた例もあった。しかしそれらは例外的な事件であり、アフリカのほとんどの地域がヨーロッパ諸国の支配を受け、独立運動が本格化するのは第二次世界大戦後のことである。多くの国々が独立を達成したのは1950年代以降で、とくに十数カ国が独立した1960年は「アフリカの年」と呼ばれた。新たに独立したアフリカ諸国は第三世界の一角を担い、ユーゴスラヴィアの指導者(9)〔①アデナウアー ②ティトー ③ナジ＝イムレ ④フルシチョフ〕らの呼びかけで1961年に始まった(10)〔①アジア＝アフリカ会議 ②コロンボ会議 ③パグウォッシュ会議 ④非同盟諸国首脳会議〕でも重要な役割を果たした。

B 古代オリエント文明は、最も早く農耕文明が成立したメソポタミアからシリア・パレスチナまでのいわゆる「肥沃な三日月地帯」とナイル川流域地帯に至る地域に展開してきた。ティグリス・ユーフラテス両河地域のメソポタミア南部では、前3千年期に、民族・言語系統不明のシュメール人たちによって都市文明が展開した。この都市文明は、侵入してきたセム語系民族の諸王朝に受け継がれた。シュメール人が最後に樹立した(1)〔①アッカド ②ウル ③ウルク ④ラガシュ〕第3王朝は、現存する世界最古の法典を発布したことで知られている。前19世紀に成立したバビロン第1王朝では、第6代の王(2)〔①アッシュルバニパル ②ウルナム ③サルゴン ④ハンムラビ〕は、同害復讐法に基づく法典を発布した。一方、ナイル川流域のエジプトでは、「エジプトはナイルの賜物」と言われるように、ナイル川の洪水が毎年もたらす肥沃な土地の生産力に支えられて統一王朝が、次々に成立した。前3千年紀前半に、ナイル川中流河谷の上エジプトに起こった第1王朝がナイル川下流のデルタ地帯の下エジプトを征服してエジプトを統一し、ピラミッドの建設で知られる古王国(第3～第6王朝)や中王国(第11・12王朝)が次々に登場して繁栄していた。前2千年紀前半までオリエントの各地域で展開したこれらの諸文明は、互いに孤立して無交渉であったと考えられる。

ところが、前2千年紀の前半の前17世紀頃から、大きく情勢が変わり始めた。まず、メソポタミアに比べて地理的に孤立していたため、外敵の脅威から免れていたエジプトにおいて、シリア・パレスチナからアジア系の民族とされる(3)〔①アムル人 ②カナーン人 ③ヒクソス ④ヘブライ人〕が、ナイル川のデルタ地帯に侵入して支配した。前16世紀初めには、メソポタミアのバビロン第1王朝が、北方のアナトリア高原を本拠地とするインド＝ヨーロッパ語族に属する(4)〔①ケルト ②スキタイ ③ヒッタイト ④フェニキア〕によって滅ぼされた。

(3)の支配下にあったエジプトでは、上エジプトの(5)〔①アレクサンドリア ②アマルナ ③テーベ ④メンフィス〕を都とするエジプト人王朝が、前16世紀半ばに(3)からナイル川デルタを奪回してエジプトを再統一し、新王国時代が始まった。さらに、新王国の第18王朝は、(3)を追ってシリア・パレスチナに進出

した。エジプト第18王朝は、(3)の残存勢力を打倒したが、新たにメソポタミア北部に建国された(6)〔①アッカド ②カッシート ③ミタンニ ④メディア〕王国と対立することとなった。エジプト第18王朝と(6)王国との関係は、ときに軍事的に対決する一方で、ときには外交関係を深めて王家同士の政略結婚を繰り返すなど複雑なものであった。このような複雑な関係が生じた理由としては、北方のアナトリア高原を本拠地とし、初めて本格的に鉄製武器を使用し、シリアやメソポタミア北部に進出をはかる(4)の存在が大きかった。前14世紀後半になると、(4)は(6)を圧倒し、さらにシリアでエジプト第18王朝と対立し、第18王朝内部の混乱から(4)が有利となり、シリアは(4)の勢力下に入った。前13世紀初め頃に成立したエジプト第19王朝は、シリアの回復を目指して、アジアへの遠征を行った。中でも、(7)〔①アメンホテプ3世 ②アメンホテプ4世 ③プトレマイオス1世 ④ラメス2世〕の率いるエジプト軍は、シリアの(8)〔①アルベラ ②カイロネイア ③カデシュ ④テルモピレー〕の戦いで(4)王ムタワリ2世の軍と衝突した。この戦いの後に現存する最古の講和条約が結ばれたが、(7)はシリアを奪回できておらず、(4)に有利な状況であったと考えられている。

さて、前13世紀末から前12世紀初め頃に、古代オリエント世界のみならず、地中海東部一帯で、(4)を含む多くの王国や都市が突然に滅亡したことが知られている。この大変動を引き起こしたのは、ナイル川デルタに侵入し、第19王朝と第20王朝に撃退された記録が残る地中海沿岸の諸民族の連合した集団であると考えられており、この集団のことを「海の民」と呼んでいる。(4)が滅亡し、新王国エジプトが弱体化したため、古代オリエント世界では、多くの民族が独自の動きを見せることとなった。例えばアラム人は、シリアの都市(9)〔①イエルサレム ②クテシフォン ③シドン ④ダマスクス〕を中心に内陸の隊商貿易で活躍し、その言語であるアラム語は、オリエント世界の商業共通語となった。前13世紀頃に、モーセの指導でエジプトから脱出（出エジプト）してパレスチナに定住したヘブライ人も旧約聖書に代表される独自の宗教思想で後世に大きな影響を与えた。

このように諸民族が、活発な活動を繰り返していたオリエント世界は、前10世紀頃から再び大きな変動に見舞われることとなった。前20世紀頃から、メソポタ

ミア北部のティグリス川流域に居住していた (10)〔①アッシリア ②カルデア
③バクトリア ④リディア〕人が、急速に勢力を拡大して前7世紀前半までにオ
リエント世界全土を征服する大帝国を築き上げたのである。

C 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において (1) 〔①レーニン ②マックス＝ヴェーバー ③トマス＝ペイン ④シュペングラー〕は、世俗的な禁欲を貫く一方で労働や利潤の追求に価値を認めるという近代資本主義のエートスの淵源を、プロテスタンティズム、とりわけカルヴァン派と、その教義を継承したイングランドの清教徒に求めている。彼らの教義の中核にある (2) 〔①万人司祭説 ②単性説 ③予定説 ④天賦人權説〕こそが、神から与えられた天職に規律と勤勉をもって励むことを求めるというのである。

16世紀半ば、カルヴァン派の牙城となったのは (3) 〔①ジュネーヴ ②チューリッヒ ③ローザンヌ ④ストラスブール〕だった。カルヴァン自らが指導者として風俗の肅正や信仰の浸透を図ったこの都市共和国は、各地で迫害された信徒たちの避難所であると同時に、教義を体系化し、教育、宣伝するための拠点でもあった。彼の主著である (4) 〔①『神曲』 ②『キリストにならいて』 ③『靈操』 ④『キリスト教綱要』〕も、フランス語版はこの地で出版されている。

フランスからの亡命者が特に増大したのは、まずは16世紀半ば以降の宗教戦争の時期、次いでルイ14世が (5) 〔①カトー＝カンブレジ条約 ②ナントの王令 ③アウクスブルクの和議 ④統一法〕を破棄してフランスの再カトリック化を図った時期だった。これによって、(3) では人口が急増するとともに、多くの手工業者や商人などが流入して織物や金細工、時計製造などの産業が興った。また、国外との取引が活発化するにつれ、銀行業も発達した。外交面では、南方の (6) 〔①ブルゴーニュ ②ミラノ ③サヴォイア ④フィレンツェ〕公国の圧力を絶えず受けながら、フランスの庇護を求めたり、ベルンなどのスイス諸邦と連携したりして、共和国としての独立を維持していた。

カルヴァン以来の教義と制度に基づく厳しい統制を保っていたこの都市にも、18世紀に入ると変化が起こる。この時期、門閥化した支配者層とブルジョワ、職人などの分断が深刻化して政治的・社会的な混乱が生じる一方で、経済的には繁栄を謳歌した。銀行業は隆盛を極め、フランスの国債を頻りに引き受けた。二度にわたりフランスの財務総監となった (7) 〔①ミラボー ②ネッケル ③テュルゴ ④シェイエス〕も、この都市出身の銀行家である。外交面では、サルデーニャ王位を手にしてイタリアに目を向けるようになった (6) 公と条約を結び、国

境を画定することができた。文化面では自由主義的な神学が広がり、啓蒙思想の発信地の一つとなった。デイドロと(8)〔①ダランベール ②カント ③ケネー ④フランクリン〕が編纂した『百科全書』でも、「啓蒙主義的な共和国」と称えられている。(9)〔①『戦争と平和の法』 ②『国富論』 ③『社会契約論』 ④『統治二論』〕を著したルソーも、放浪やフランス滞在の時期が長かったものの、元はこの都市の出身である。この著作は市当局に拒絶され、彼自身も市民権を放棄することにはなるが、故郷への愛憎混ざった思いは終生変わらなかった。

18世紀末以降、フランス革命に呼応した革命の勃発、ナポレオンによるフランスへの併合、再独立といった混乱を経て、ナポレオン失脚後の(10)〔①サン＝ステファノ条約 ②ティルジット条約 ③ライン同盟 ④ウィーン議定書〕において、(3)は永世中立となったスイス連邦の一州となった。現在でもスイスの、ひいてはヨーロッパの金融や交易の中心地の一つである。

Ⅲ 次の文章を読み、下記の設問(1)～(10)に答えなさい。〔解答用紙記述〕(20点)

かつての中国の政治家や官僚の中には、学者・文人としても著名な人物が少なくない。

一般的にいて、儒学を奉ずる人士は、「学問に優れた人物は政治に積極的に関与して民の幸福をはかるべきである」と考える傾向が強かった。

儒家の事実上の祖とされる孔子からして、自身の祖国である魯の国政に参与したり、各地の諸侯のもとを訪れて自らの政治的理想の実現を訴えたりしている。

孔子が活動した時代は「春秋時代」、さらにその後の時代は「戦国時代」⁽¹⁾と呼ばれる。この時期にはいわゆる「諸子百家」があらわれ、中国思想界の黄金時代の一つとされるが、『韓非子』⁽²⁾の「顕学篇」では「世の顕学（有力な学派）は儒墨なり」とされていたように、当時において儒家と墨家は大きな勢力を有したようである。

その後、墨家の勢力は衰退していったが、儒家については前漢の時代に「五経」⁽³⁾と呼ばれる儒学の經典が整備されてゆき、武帝の時代に活躍した儒学者の董仲舒などが、儒学の影響力を高めるのに貢献した。

前漢の末期には、王莽が外戚として政治の実権を掌握し、復古的な儒学の理想を実現しようとして新たな王朝を建てたが、結局農民反乱などの国内の混乱の中で短期で滅亡し、劉秀が漢を再興して、後漢の初代の皇帝となった。

後漢の次の魏晉南北朝時代には貴族が世襲的に高位の官職を独占した。隋の時代⁽⁴⁾には試験によって人材を登用する科挙が導入され、唐も科挙を継続したが、貴族の勢力はなおも相当なものがあつた。

唐末の戦乱以降、貴族は没落し、宋では科挙制度がさらに整備され、科挙によって⁽⁵⁾選抜された儒学的教養を身につけた士大夫層が官僚の中核を構成するようになる。

北宋では、政策の方針をめぐって新法党と旧法党が激しく争ったとされるが、両者ともその中心的人物はいずれも科挙の合格者であり、かつまた一流の学者・文人であつた。⁽⁶⁾

朱子学で知られる南宋の朱熹も官僚としての経験を持ち、陽明学で知られる王守仁は、明朝の高官として、軍事面でも反乱の鎮圧など大きな業績をあげた。

明末の政界は東林派と非東林派の党争によって混乱したとされるが、東林派の名は顧憲成が再興して学を講じた無錫の東林書院に由来する。顧憲成は儒学者として著名であるが、やはり官職についていた時期もある。

19世紀半ばに太平天国の鎮圧で活躍した曾国藩も、清の高官であるとともに、儒学や文学の方面でも名高い。また、19世紀末の改革運動のリーダーとして著名な康有為は、いわゆる公羊学派の流れを受け継いで異端的な儒学理論を打ち立てた学者でもあった。

康有為門下の梁啓超は中国では師の圧倒的な影響下にあったが、日本亡命後に多くの日本語文献に触れた結果、康有為からの思想的独立を果たした。彼は『清議報』『新民叢報』などの雑誌を通して中国の思想界に多大な影響を与えたが、学術研究の面でも多くの業績を残している。

他方で、梁啓超は清末には立憲派のリーダーの一人として政治的運動に関与し、中華民国の時代には政府の要職につくなど、政治とも深い関係を持っていた。

第一次世界大戦当初、中国は中立の立場だったが、1917年には対独参戦の可否が大きな政治問題となった。その際、梁啓超は参戦賛成の立場から論陣を張るとともに、様々な工作を行い、1917年8月に中国はドイツに対して宣戦を布告した。⁽⁹⁾

さらに、梁啓超は第一次世界大戦後のパリ講和会議の時期に欧州に渡り、直接会議には参加しなかったものの、彼が電報によって中国にもたらした山東半島の利権問題をめぐる交渉状況についての情報が、五・四運動の一つのきっかけとなったともされている。⁽¹⁰⁾

〔設問〕

- (1) 下線部(1)について、「戦国時代」という呼称はある書物の名に由来する。その書物の名を答えなさい。
- (2) 下線部(2)について、『韓非子』の著者とされる韓非は紀元前233年に獄中で自殺した。彼の思想は法家に分類されているが、司馬遷の『史記』の伝記によると、韓非には儒家の有力な思想家に学んだ時期がある。「性悪説」の主張などで有名なこの儒家の思想家は誰か、答えなさい。

- (3) 下線部(3)について、「五経」の中には『詩経』が含まれている。この書は中国最古の詩集であり、主に黄河流域の諸国の詩歌を集めたものである。これに対して、戦国時代の長江中流域の大国の出身である屈原らの作品を集めた詩集が漢代に編まれた。この詩集の名を答えなさい。
- (4) 下線部(4)について、魏の時代からはじめられた官吏登用制度も、貴族が高位の官職を独占する上で後押しとなった。この制度の名を答えなさい。
- (5) 下線部(5)について、宋では、皇帝みずからが行う最終審査が新たに科挙に導入された。その最終審査の名を答えなさい。
- (6) 下線部(6)について、新法として、旧来の種々の社会的問題の解決を目的として様々なものが打ち出された。1069年より、農民に対して低利での貸し付けを行い、収穫時に元利を返済させる政策が施行され、一定の成果をあげたとされる。この政策の名を答えなさい。
- (7) 下線部(7)について、明の滅亡後、清に仕えることなく著述活動を行った黄宗羲の父も東林派であった。黄宗羲自身は陽明学の系譜に連なるが、同時に実証的な研究方法を重視し、その点で考証学の祖の一人とされる。黄宗羲と同世代で、やはり明の滅亡後、清に仕えることなく学術研究に従事した人物も、実証的研究手法から考証学の祖とされる。『日知録』などの著作で知られるこの人物は誰か、答えなさい。
- (8) 下線部(8)について、曾国藩が太平天国鎮圧のために率いた軍隊は清の正規軍ではなく、郷勇とよばれる一種の義勇軍であった。曾国藩の命により李鴻章も郷勇を組織して、太平天国鎮圧に貢献した。李鴻章が組織したこの郷勇の名を答えなさい。

(9) 下線部(9)について、中国がドイツに対して宣戦を布告する前に、アメリカも中立の立場を変え、ドイツに対して宣戦を布告している。アメリカの参戦は、ドイツがある作戦を実施したことが一つのきっかけとなっている。この作戦の名を答えなさい。

(10) 下線部(10)について、孫文は五・四運動の影響を受け、自らが率いる秘密結社的組織を大衆的政党へと転換させるために、中国国民党と改称した。この改称前の秘密結社的組織の名を答えなさい。

Ⅳ 以下の各文章1～4にはそれぞれ明白な誤りが一つずつ含まれている。誤りの語句を解答用紙所定のA欄に、それに代わるべき正しい語句をB欄に記入しなさい。また各文章1～4に付された設問(1)～(4)の答えを解答用紙所定の欄に記入しなさい。〔解答用紙記述〕(16点)

1. 東南アジアでは古くから中国や南アジアとの交流が盛んで、貿易の拠点を中心に築かれた港市国家が多く栄え、文化面でもこれらの地域からの影響を強く受けている。諸島部においては、7世紀半ばにスマトラ島のパレンバンを中心にシュリーヴィジャヤが成立し、海上交易で栄えた。唐僧の義浄はインド訪問の際に広東からこの地に至り、サンスクリット文法を学んだのちインドに旅立った。彼は帰路にも当地に立ち寄って長期滞在しており、この地が中国とインドの中継地として重要であったことがうかがえる。一方、ジャワ島では8世紀以降、バンテン王国やマタラム朝が栄えた。当地のインドからの影響を伝えるものとして、前者が築いた大乘仏教寺院のボロブドゥールが特に有名である。

設問(1) 東南アジア大陸部では、7世紀ころ、タイのチャオプラヤ川下流域でドヴァーラヴァティー王国が成立し、やはり交易で栄えた。この国を建てた人々の名称を答えなさい。

2. キプチャク草原(現、カザフ草原)に台頭したウズベクはしだいにオアシス地帯に進出し、シャイバーニー＝ハンの時代になると、1500年にサマルカンド、1507年にヘラートを攻略し、ホラズム朝を滅ぼした。その後、同集団は中央アジアにブハラ＝ハン国、ヒヴァ＝ハン国をあいっいで成立させたが、18世紀初頭に入ると、フェルガナ盆地を拠点として、コーカンド＝ハン国が建国された。同国はしだいに同盆地全体を掌握するとともに、清朝とは朝貢関係を結び、新疆と盛んに交易を行い、19世紀初頭に最盛期を迎えたが、1876年にはロシア軍の攻撃を受けて滅び、同帝国のトルキスタン省に併合された。

設問(2) コーカンドに生まれ、1865年、清朝の支配する新疆に入りイスラーム政権を樹立した人物の名を答えなさい。

3. 15世紀から17世紀にかけて、ヨーロッパではめざましい科学の発展がみられた。その代表とされるのが、『天球回転論』を著して地動説を主張したポーランド出身のコペルニクスである。彼の研究はイタリア出身のガリレイ、ドイツ出身のケプラー、『プリンキピア』の著者ジェンナーらに影響を与え、天体の運動や物理法則についての研究が進展した。この時代には、ヨーロッパ各地に各種の科学協会やアカデミーが創設され、専門的な科学者が活動する場が整備された。こうした変化を科学革命と呼ぶ。

設問(3) 近代の科学者達に影響を与えたヘレニズム時代の学者で、てこの原理や浮力の原理を発見したとされる人物の名を答えなさい。

4. 生物の研究は19世紀以降の社会に大きな影響を与えた。『種の起源』の著者ダーウィンが提唱した進化論はキリスト教的な人間観に衝撃を与え、大きな論争をまきおこした。医学に関わる分野では、パストゥールが発酵や腐敗が微生物によって起きることを証明し、コッホは結核菌やコレラ菌などを発見して伝染病の対策に貢献した。また、リンネが修道院のエンドウ豆を用いて行った交配実験の成果が、著者の死後に再評価され、彼は遺伝学の祖と呼ばれるようになった。

設問(4) 19世紀のヨーロッパでは工業化が進展する社会の変化に対応しようとする政治・社会思想も発展した。エンゲルスと協力して『共産党宣言』を著し、社会主義思想を体系化した思想家の名を答えなさい。

V 次の文章は、ケネス＝ポメランツ（川北稔監訳）『大分岐』の文章を一部抜粋したものである（中略した箇所を「……」で示す）。この文章を読んで、下記の設問(1)～(12)に答えなさい。〔解答用紙記述〕（24点）

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

〔設問〕

- (1) 下線部(1)について、イギリス、フランス、オランダ、ポルトガルなどの商人と、アフリカに植民地を持たないスペインが結んだ奴隷供給請負契約を何と呼ぶか、その名称をカタカナで答えなさい。
- (2) 下線部(2)について、スペイン領植民地の略奪を目指して西航し、結果的に世界周航を遂げ、1588年にはスペイン無敵艦隊をアルマダの海戦で破った、イギリスの船乗りの名前を答えなさい。この人物はエリザベス1世の対外政策を支えた。

- (3) 空欄 (3) にはいる言葉を漢字4字で答えなさい。この言葉は、農業基盤の社会から工業を基礎とした資本主義経済体制への移行と、それに伴う社会変化を表す。
- (4) 下線部(4)について、現在のボリビアに位置する、アメリカ大陸最大の銀山の名前を答えなさい。この鉱山から採掘され、大量にヨーロッパに輸送された銀は、大規模なインフレーションを引き起こす一因となった。
- (5) 空欄 (5) にはいる言葉をカタカナで答えなさい。この言葉は、商品作物栽培を目的とした大規模農園制度を表す。モノカルチャーの性格から現地の農業構造を破壊し、現在までその弊害が残されている。
- (6) 下線部(6)について、水車の力で動く水力紡績機を発明し、工場制大量生産への道を開いた企業家の名前を答えなさい。大量の綿布を西アフリカに供給することは、アフリカ人奴隷を購入する上で、非常に重要であった。
- (7) 下線部(7)について、鉄製レールを大量生産することを可能にしたコークス製鉄法の考案者の名前を答えなさい。イギリス中部コールブルックデイルに位置する彼の製鉄所は、奴隷貿易に用いられた鉄製品を多く生産し、供給した。
- (8) 下線部(8)について、この画家が描いたスペイン王フェリペ2世の肖像画がイギリスに送られて、イギリス女王との結婚に大きな役割を果たした。この女王の名を答えなさい。この女王は、対フランス戦争に加担してカレーを失うなどし、国民の反発を招いた。
- (9) 下線部(9)について、ジェームズ1世に対して宗教的自由を求めてメイフラワー号で大西洋を渡り、マサチューセッツ東部に移住したピューリタンを中心とする人々は何と呼ばれるか、その呼称をカタカナで答えなさい。

- (10) 下線部(10)について、黒人奴隷をもちいたタバコ栽培で繁栄したヴァージニアの大農園の出身で、合衆国独立宣言の起草の中心となりアメリカ合衆国第3代大統領となった政治家の名前を答えなさい。ヴァージニアは、独立後5代の大統領のうち4人を輩出している。
- (11) 空欄

(11)

 に入る商品（食品）の名称を漢字2字で答えなさい。この商品は、西ヨーロッパ、西アフリカ、環カリブ海域を結ぶ三角貿易において、最も需要の大きな商品となり、重商主義の政府によって販売が促進され、ヨーロッパにおける消費社会の誕生を促した。
- (12) 下線部(12)について、フィリピンのマニラと結んで、メキシコで鑄造された銀貨をアジアへと輸出した港町の名を答えなさい。中国人商人がマニラに運んだ絹や陶磁器は、銀と交換され、メキシコを経由してスペインに運ばれた。